

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・・



2020年
7月13日
第98号

ウマノスズクサ（ウマノスズクサ科）

第一圃場の支柱には、上部が緑紫色のラッパ状で、下部が球状に膨らんだ面白い花が見られます（支柱の上のほうに咲き小さいので、よく見つめて探してください）。葉は三角形状で、日本でも野原や山裾でよく見られる多年草です。薬用としては、根から青藤香（セイトウコウ）または青木香（ショウモッコウまたはセイモッコウ）、果実（果実ができるのは稀ですが）から馬兜鈴（バトウレイ、植物の漢名と同じ）と呼ぶ生薬となり、前者が祛風清熱、後者が止咳平喘、清肺を目的に使用されていました。しかし、腎障害を起こすアリストロキア酸が含まれていることが判明して以来、現在では日本、中国ともに、使用禁止となっています。なお、「馬兜」とは、戦場に向かう馬鎧（うまよろい）の一部で、馬の正面に当てる防具、敵を威嚇するための装飾でもあり、葉の形がこの馬兜に似るところから。「鈴」は、実の形が馬に付ける鈴に似てることからで、これが和名の由来とされています。余談ですが、よくここの解説で、馬の鈴を首に付けると記されていますが、耳のそばで鈴が鳴ると馬は興奮するので、他の場所と私は思っています。



ウド（ウコギ科）

第三圃場では背丈が約2mくらいの堂々とした姿に、集合した球形の花がいやでも目に入ります。特有の香りがあり、春の山菜としてよく知られ、栽培（軟化栽培）も行われます。因みに私の定番は、酢味噌和えです。ウドは早く大きく成長しますが、茎を切るとすぐ腐ってしまい、また太いわりに折れやすく、中が"うつろ"で外側の繊維も弱く、外見ばかりで、大きくても役に立たないことで、「ウドの太木柱にならぬ」のことわざが生まれました。"うつろ"のことを、昔は"うど"と言ったようで、今でも岐阜県の一部で習慣が残っています。日本では、根茎、根、それぞれ独活（ドクカツ）、和羌活（ワキョウカツ）と呼ぶ生薬となり、どちらも祛風を目的に使用されますが、中国での「独活」はシシウドの根を基原とし、「羌活」は日本、中国ともに*Notopterygium incisum*（和名なし）の根茎を基原とするので、かなり複雑です。

今、こんな草木が
楽しめます！！